

シリーズ研究所紹介 その③

国際問題研究所長 三好正弘



本シリーズの①経営総合科学研究所、②総合郷土研究所の紹介において、各所長がその「研究」の性格を強調されていたのは、わが意を得たりで、心強い思いです。

社会に対する大学の貢献は高度の教育と研究にあります。国際問題研究所（以下、「国研」と省略）は研究に重点を置く機関として、大学創立の翌々年の1948年に開設されました。政府系の日本国際問題研究所や他大学の類似の研究機関が40年程度の歴史を有するのに比べると、愛大の国研は創立から55年になり、先輩格です。

大学自体が戦後もなくの厳しい経済社会状況の下で意気高らかに誕生したのと同じように、国研も乏しい物質的条件の下ながら、遠く世界全体を見渡す視点から研究活動を開始しました。その活動の成果の一部を当初『国際政経事情』というガリ版刷りの冊子として刊行したことが、記録に残っています。

大学が戦前上海にあった東亜同文書院大学のスタッフを中心として作られたいきさつからも、国研は当初から中国研究に力を入れ、国内外にその成果が知られています。蔵書も中国関係書が多く、他所にない文献資料を求めて内外の研究者が利用に訪れています。

昨年度大学に「国際中国学研究センター」(ICCS)の設置が文部科学省によって認可され、世界の中国学研究の中心的役割を果たすことが期待されており、その調査研究のための「図書館」として、国研は一層重要性を増すことになるでしょう。このことを十分認識して、今後さらに研究所としての機能を充実させるよう心がけます。

他方で、研究対象地域の拡大が必要であると考えられ、アジア、とくに北東アジアと東

南アジアの研究に力を入れたいと思います。

北東アジアについては、昨年秋に「21世紀における兩岸関係と日本」と題する国際シンポジウムを開催し、従来むずかしいとされていた著名な中国研究者と台湾研究者に一堂に集まって頂き、有意義な意見交換を実現しました。このフォローアップとして、向こう2年にわたり、朝鮮半島を加えた北東アジアの国際関係を分析する作業を行います。

東南アジアに関しては、これまで大きな研究成果を上げている訳ではありませんが、日本の将来にとって重要な地域ですから、その地理、歴史、政治、経済、法律、文化などの諸局面について順次調査研究を行いたいと考えています。

国研は、内外の文献を収集・所蔵して研究者の利用に供するという面ではすでに十分な役割を果たしてきましたが、これに加えて、今後は積極的な研究成果の発表という、“発信”作用を従来以上に重視して参ります。

学生の皆さんには、国研がこのような理念で動いていることを知って頂き、定期的に開催している研究会、講演会などに積極的に参加されることを期待します。若い斬新な発想は、専門研究者にとってもよい刺激になりますので、歓迎します。

愛大の設立趣意書には、「世界文化と平和に寄与すべき新日本の建設に適する人材は国際的教養と視野を持つこと」が最も必要な資格の一つであると謳われており、このような人材の育成が建学の精神とされました。学生の皆さんには、ぜひその高らかな理想と精神を国研の活動から嗅ぎ取って頂き、プライドを持って国際関係の研究に励んで頂きたいと思えます。問題意識の高い学生さんには、国研は協力を惜しみません。水準の高い研究を我々と一緒にやっていきましょう。